小夏のみち

下

中村俊定文庫
文庫 18
133
2

稲田小図書

鳥之道住集巻之下

元禄七年六月廿一日

大津木篇庵ゟ

秋ちの実ん志ゐや四五つま

志ゐつゝぬきる捨子のゑ　木篇

月朔るあふとの文乞落く　惟然

中村俊定文庫

起るころ伏よりさきさき　支考
降ましるあした雪みそれの一ふり　篇
まのひぬいろ糊さいく次れ　蕪
夕食をくハて隣の招を待　秀
なるまゝ笠と毎もれぬ大きけ　然
寝くて吐のかるる暗也深　蕪
ろろし蚤乃喜れひるね　芝
佛壇の障子ま二月のさしかも　然

探かうきおける秋の也　秀
八朔乃礼をおそく仕廻ケり　芝
ふみ荷の結乃はつるもの　蕪
西京屋を把早ふみ出る新　秀
特ますする醫者乃留　然
旅うけつゝ細ねこゝぬ花の垣　芝
受袋めくこゝをたゝふ　秀
年改うういさゝやつゝ供ゝ　蕪

節翁

然庵

翁

考槃

然庵

考槃

翁

ほくしの服新赤土乃岸　然

志ゝしとそきみを月の光哉　土芳

義のまゝらに秋哭ん寺お　玄梅

栗稈乃いれもの哉ふさりて　猿雖

苔むすやうな人のあつまる　雪芝

長松を旅まくらと指をさす　苔蘚

明ほとけ風を除ぬ哉　百年

竹垣と他人をへだてゝ住ふるしの卓袋
をいふへ陽をあひこゝろ芳
うちとゝ人こゝろを独書梅
前髪ゆへうに狩るかあけの家舵
をのあけよき書北物毎芝
法しを越る六田の庁道薗
客会の荷を解ふる協を達午
係乃か半(け)むもを女る素ろ袋

戸の口を仕切ふるしの紗協を芳
浪うちあつる板をそし梅
花の比初協をん破しし客雛
素ほろ案を声をそめ風芝
ナ(な)ゝしくしまもをそまをめれ薗
他人ゝりてゝんりとせぬ午
片隅よ至ろ当歩る境北家袋
出ろふろ先へ五サ春ハ芳

訊竹

舍羅

何申

羽竹

其道

某產

挨拶も念佛講の世話役 因之
をかと なるも 吹ハ 萩原 千百
場こそおほの末裔も独活ところ 知外
行のあるう 行灯へさるふる花りふ 訊竹
娘をものの絶景をつきあひ 舎羅
初尾をとひこゑはいいぬるなわ 仰中
かをひしと町場の色女なれ 明竹
一夏む通ひと大根葉あてくふ 其道

不出来をする余をう足西瓜きし 芙雀
眠を半分けたるを昭乃月 因之
物物うり仕事の分もたかとも 千百
い川のるるや町ふなる萩 知外
あ女人をうく久しう幽霊久乳 訊竹
浪るる紀そうくそうも也 舎羅
記もかくもそうと降てよい日和 仰中
読合事も芝うを画し 明竹

ちの比無昌なるの八幡　其方
今朝をなくて　酒よまぬ　茉雀
芸理やりて乃を行きる萩屋　因之
えしまるれて　千百
あふくとの姫君を月まなたる　紫
ものをまよきぬ武三郎　仇竹
とをあそ白紙あるを　舎羅
つそそと含よ　汝乃中　汝ども

湾そるをの紀きる弁戸　羽竹
三日さるを　其方
いやあ姫もあまんまて　茉雀
なそなの空を陰れ　因之
花まやさうわれ比のまの乳好　千百
こへを脱さや暇なそら　紫

口切比丘伝写

紀の国名所百人一首

これなとおける初春乃うた　壺中

峠の雨を声ぬきて神乃宿　注定

めけのそこ乃おほき土橋　去来

すあけ(ず)ありこ(き)ぬる音ぬ月　野明

先手ぬ衆おふ秋ゝ芳　芦角

風雨

ウ

在々処々の
こと書ける
しるる
むかし

川物と乃をかしくも秋菜ひろふる　探芝

日そちらく〳〵と初更乃客を訪ふもあれこれ　游刀

いまもとや川をへたてゝ八斗一陽なつむ　昌房

月出ぬまそそと記捨らるゝ　芝

きそ〳〵もしの息ひく鳴　秀

正秀

鮎

早稲も鮎も乳納そうなる頃 房
多喜の硯乃筆の極まれ 刀
小切用るんそうな娘好き思ひ 秀
そそけておのし板本乃宿 芝
焼恒のくふさも有がら 房
化もふさほのまそうゆるち 秀
なれくとう筋くの唐さうろ 刀
ぬるそ杭も深をそ筆 房

有り曲なる多き月なふうと起出 芝
酒を乃かう水をせいそ 秀
伴るへをおそれ支度る見ゆる花ル 房
あそこのれまに解あひ衣 刀
なの濁せ板より綾そもの見 芝
簾れこ多そのたのまれそせ 房
かそつきそ壱そ安栄を乳敬 秀
如れる吸せ降そまけり 芝

ものなひとをこんさをきる時ハ　刀
堅う這そうあるほの花　秀
小國の松をきし　房
月えの友よいつきうる庵る　刀
きつまれ松をもの楽ミ受あき　芝
山をまつそ庵こそよゆく　房
おのつう石ハ佛よなりかる　秀
そかしこうけハ食もこそう　芝

家もちとそあるものの松よりる　刀
三日まへうてこれ乃庵　秀
老功乃つもれハ療治よる　芝
ひろ北の所酒叶姫縄法　房
谷川のこ松久きこ花盛　刀
ひろこ入みの物脊を千　芝

花のあふ盃うるれい兵なき　紅石

まゐてこい〳〵そよ雉の傍ら　惟然

ぬるむらもあの濁まや沈るん　玄梅

あそろへら初る旅乃あこと　曇中

月の夜もよふ〳〵る狂人の様　此

寒し〳〵れ哭秋きる衆　石

ウ　あらなまつし　　中
　　きるをひ毎日所江いひ入　　梅
　　踏出して居れハ脚場の処を　　石
　　ものむつ〳〵と肩さ〳〵う江　　然
　　行をとゝ〳〵みの江をのひ〳〵れ　　梅
　　出るとゝ〳〵を見て乃悼　　中
　　井のをと〳〵あれハ潔斎渡ら　　然
　　大気狂ふ夕月のゝき　　石

秋ふく去てゆらとさゝし　　中
もゝやこゝしく此末の出来り　　梅
指ふるハ笑ひとなりぬ我てて　　石
かけまをくとある等乃史　　然
なゝのれと江へて仇のみれ　　梅
つゝとと長形四ヲ仕舞し　　中
はやる事をハ人ゝ笑ふる　　然
雪ふる家れてあゝ日のあく　　石

年常のごとく降ぬ中ぬり　中
ふところ人懐しく芽（トテ）味噌のいさ　梅
百くさる桔梗も花の咲くさま　石
さゝやかなる月の新吉原さま　鉦
朋厚の掏摸さゝで帰（かへ）るなり　梅
をかしきまり袴さまみあれ　中
又〳〵て毎志ろ〳〵れろ〳〵斤（ぎん）さ　鉦
なそ（は）そ〳〵ても宵てあ〳〵梅おろ　石

ウそ〳〵紙雛ハ乞外堂の誘もろ〳〵け　中
むこいるまゝ〳〵土ニつ紀こ幼　梅
就なれハ同しことをくり返　石
もろ〳〵ある薪の徳さへ　鉦
二三日居れ祇園を礼花盛　梅
子共吏ろ〳〵家の長閑さ　中

楊も妃ハ棄冂初や順秩川

一ところの免ハ敷ゟまめく　鬼市

去年よモ堂長吉のゟ陽　紅石

なるやらものを川てとゟ　志葉

為次の敷と南北杉やし　栄枝

ぬるこまてハ綿のみえたま　盛人

玄梅

ウ お撲坊のくはれて悩る日みそ　市
窓支こころのはるを　沙佗ま　栃
猿川の孫さしむくまられて　葉
一本うゑ屍のみそまつて　石
咲うる杜丹花をつて　人
活蜂ころめそ人さいそれし　枝
むら紀も風うあをりて破うを　栃
うんちうりおてをくみ世　市

十六夜ゑ高みて　石
よいころきし　ほの彼ン岸　葉
花のうきまる布ヲ杖もきて　枝
せきのよにものらいそれぬ　人
二分のをそふと丹のこそある　葉
きこふ雛よおむの什きり　栃
かこそをおしぬる杖的方　人
疾ま紀らこ宿て借座し　石

つゝまでのゝこまものをいろ人を　市
きのふのあれこそとりこもる　枝
とりしてもおもあるる春月　柳
先かくしハの稲をとりの也　葉
よゝものいたゝなれてゝ　石
とつもきぬ雑木綾をゝ　人
今更ものゝ念仏のときれあま　枝
かてひをさせて書よ定免む　市

裏口をのぞけハ苔よりのあま也　石
銀のそゝひて毎へまいるゝ　柳
誰うまゝ楽しも忘れぬ古ゝ　市
云のなあるゝを喰るやきめし　葉
かゝさまよもゝ塔の花ゝ撮　人
筆乃あ乃ゝあれをあし　枝

名古屋集　京寺町二条上ル町　升屋庄兵衛板